

An aerial photograph showing a complex road interchange with multiple lanes and overpasses. The surrounding area includes residential buildings, parking lots, and agricultural fields. A large, semi-transparent white box is overlaid on the top half of the image, containing the title and subtitle. Another smaller white box is overlaid on the bottom right, containing the date. A third white box is overlaid on the bottom center, containing the publisher's name.

丹上遺跡 (その8)

中央環状線美原ロータリー道路
改良工事に伴う発掘調査報告書

1994年 3月

(財)大阪文化財センター

表紙 主要地方道

中央環状線美原ロータリーを上空から望む
(上が北でロータリー右下が今回の調査区)

はじめに

丹上遺跡の調査はこれまでに何度も実施されている。近畿自動車道の最初の調査においては、大型の掘立柱建物がコの字状に配置される奈良時代の方形区画と思われるものが調査されている。これらの建物は古代の官道である丹比道に面した位置に立地している事と大型建物が方形区画を作っているらしい事から、何らかの役所的建物ではないかと推測されている。今回の調査地はこの建物群に近い位置と、北から東側を通る丹比道が調査地東側で向きをやや南に変える位置にある事から、何らかの施設の存在を考えても良い所である。ところが発掘調査の成果では、はっきりとした遺構が見られなかった。この事の意味には色々と解釈があり、元々遺構が何も無かったと考えるか、或いは担当者の考えるように何らかの意味があって遺構が作られなかったと言う考え方もあり、今後の調査に期待したい。そしてこの調査成果には一つの重要な意義があり、今後になされる調査成果と考え合わせると、歴史的な意味も明らかにされてくると信じている。

調査を実施するにあたり、大阪府土木部を始めとした関係各位の協力を得て、多大な成果を得た事は嬉しい事である。ここにひとえに御礼申し上げるとともに、今後とも御支援を頂くようお願い申し上げます。

1994年3月31日

(財)大阪文化財センター
理事長 坪井 清足

例 言

1. 本書は、主要地方道大阪中央環状線内の美原ロータリー内での道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査として実施した大阪府南河内郡美原町丹上に所在する丹上遺跡の第8次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査は大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが大阪府土木部富田林土木事務所の委託を受けて実施したものである。
3. 調査に際しては、日本道路公団藤井寺管理事務所、大阪府土木部富田林土木事務所および松原建設事業所等の格別の配慮と協力を頂いた。ここに感謝の意を表する。
4. 現地の調査は1994年2月8日に準備工に着手してから、1994年3月25日に全ての作業を終えるまで延べ46日間実施した。
5. 本調査並びに本書作成は、(財)大阪文化財センター調査課長 中西 靖人、調査課第3係主幹兼係長 赤木 克視の指導の下に、現場調査は調査課付主任技師 金光 正裕、第3係主任技師 入江 正則が担当し、写真関係は技師 立花 正治、調査員久禮 孝志が担当した。
6. 本調査の外業や遺物整理については、下記の方々の協力を得た。
(外業) 川辺 稔、吉川 長太、山本 順治、宮川 昭幸(大阪市立大学)
(内業) 松本 昭子、内山 信子、宮武 府子、松村 より子、西田 久美
7. 調査に際して、次の機関に写真測量及び土器の胎土分析を依頼した。
航空写真測量 ワールド航測株式会社 小野 公明氏
胎土分析 株式会社 第四紀地質研究所 井上 巖氏
8. 本書は入江が執筆し、西田久美が編集した。

目 次

I 調査に至る経過と調査方法	1
II 調査地周辺の地理的歴史的環境	3
III 調査の成果	7
IV まとめ	11

挿 図 目 次

図1 調査地の現況	1
図2 丹上遺跡過去の調査範囲図	2
図3 周辺の歴史的環境	3
図4 丹上遺跡周辺図	5・6
図5 層序模式図	7
図6 遺構平面図	9
図7 遺構断面図	10
図8 出土遺物	10

写 真 目 次

写真1 調査区北半部（西から）	1
写真2 調査区南半部（西から）	1
写真3 北側壁面（南から）	7
写真4 東側壁面（西から）	8
写真5 東側壁面（西から）	8
写真6 遺構8（南から）	8
写真7 遺構9（北西から）	9
写真8 遺構11（北東から）	9

表 目 次

表1 遺構一覧	10
---------	----

I 調査に至る経過と調査方法

丹上遺跡の今回の調査地点は府下の主要幹線道路である府道松原泉大津線と堺羽曳野線、中央環状線の3つの主要幹線道路が平面的に、しかも複雑に分岐している交差点内である。このような交通の要衝であるため通行量が非常に多く、交通渋滞が日常的に起きて交通の隘路となっている事と、交通事故が多発して交通の障害となっている事の2つの問題から、これまでに道路改良が日程に上がっていた。この交差点を3本の主要道路が平面交差している構造から、3本の道路

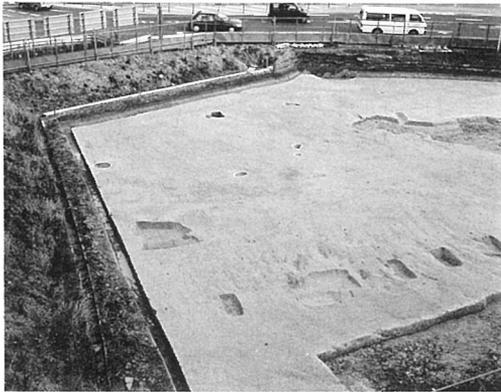


写真1 調査区北半部（西から）



写真2 調査区南半部（西から）

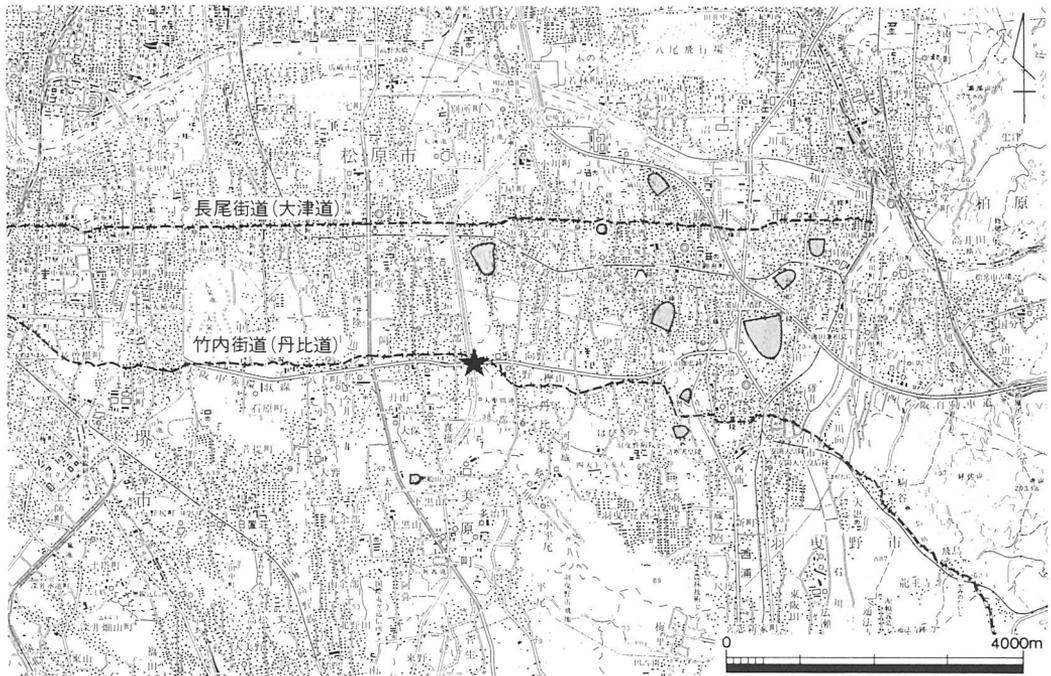


図1 調査地の現況 (1:100,000)

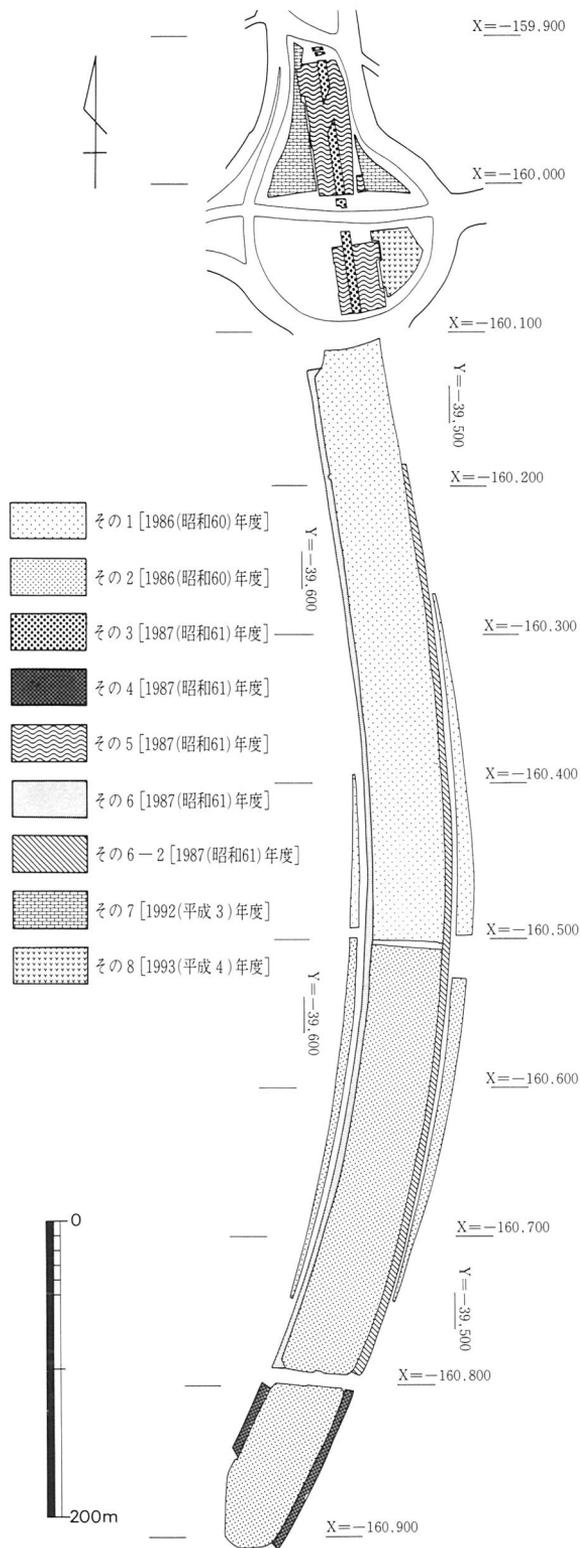


図2 丹上遺跡過去の調査範囲図 (1:5,000)

が立体交差する構造に改善して、渋滞の発生を極力少なく、交通事故の起きにくい流動的に流れる構造に替える計画が大阪府土木部によって立てられた。この計画の施工に際して、土木部は新しい立体交差の道路予定地が埋蔵文化財包蔵地であるので、埋蔵文化財調査について文化財保護課と協議した。この結果財団法人大阪文化財センターに調査の依頼がなされた(図1)。

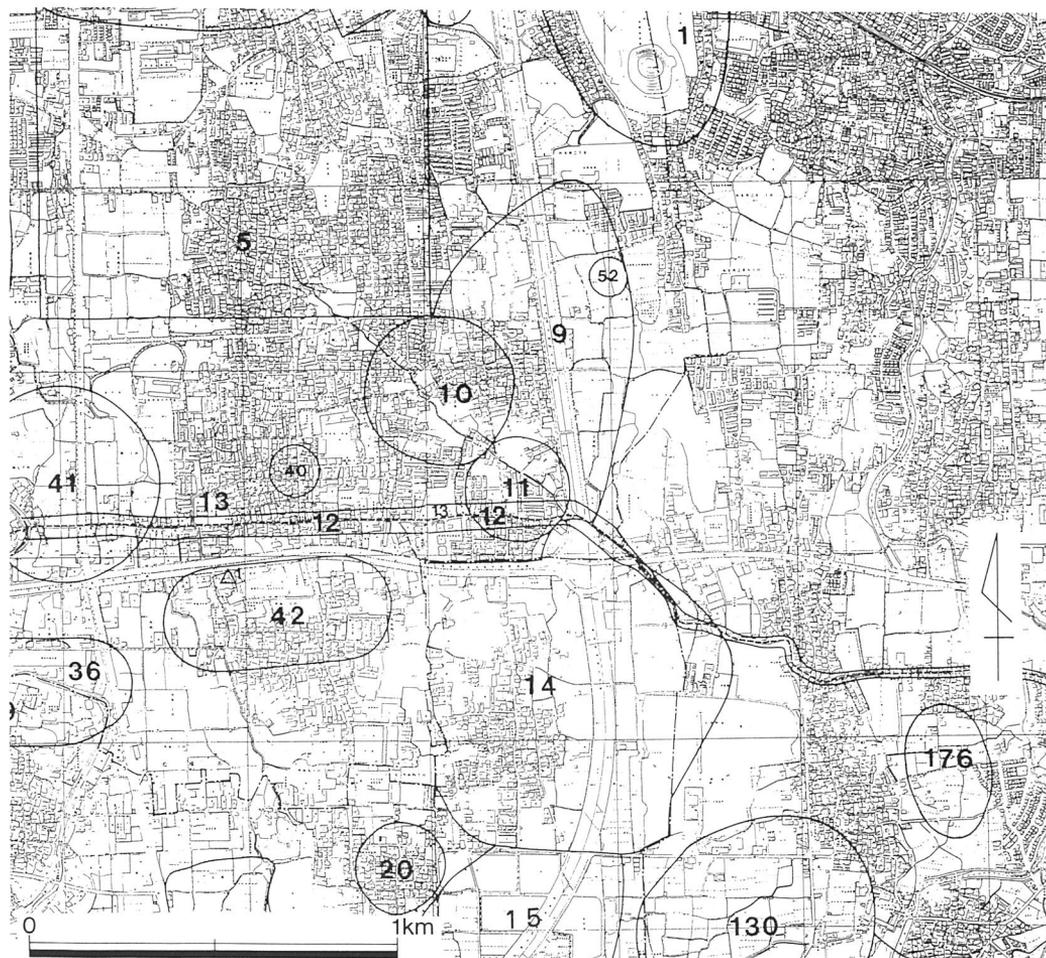
丹上遺跡の近畿自動車道関係については、すでに近畿自動車道建設時に、中央環状線が大きな円形を描いている通称「美原ロータリー」内は丹上遺跡その3、その5として実施し、これより南の近畿自動車道と松原泉大津線併設区間の調査を丹上遺跡その1、その2、その4、その6、その6-2として完了している。一方府道関係では、美原ロータリー内の近畿自動車道の両側の部分のうち平成4年度に北半部の調査を丹上遺跡第7次調査として実施した。今回の調査は美原ロータリー内の南半分の未調査部分のうち、南東側を対象として丹上遺跡の第8次調査として実施した(図2・写真1・2)。今回の調査を実施した事で対象区域内での未調査範囲はロータリーの南西側だけとなる。

現地での調査は約1.5~2mに達する厚い盛土層を機械掘削によって除去する事から始めた。その後包含層上面で機械掘削を止めて、以下は中位段丘層上面まで人力掘削を行った。遺物の取り上げ、測量は国土座標を用いている。他は(財)大阪文化財センターの調査マニュアルに従って行った。

II 調査地周辺の地理的歴史的環境

当調査地は標高約36mを測る中位段丘上に立地しており、周囲は洪積台地特有の広々とした地形が極めてなだらかに続き、遮るもののない広い視界をもっている。当調査地周辺では中位段丘層が南側の和泉丘陵から緩やかな傾斜を持って下りつつ北に伸びて、大和川以北では中位段丘層の上に沖積層が被って河内平野となっている（図3）。

当調査地の東側約1.0kmには、東除川が中位段丘上を蛇行しつつ南から北へ流れている。東除川が開析した谷は幅広く緩やかな傾斜を作っている。中位段丘面と谷底との比高差は約10mを測り流路は谷の中央を流れている。また調査地西側約1.3kmには西除川が、東除川が形成した開析



- | | | | | | |
|-------------|-----------|-----------|-----------|------------|---------------|
| 1. 大塚山古墳 | 5. 丹比柴籬宮跡 | 9. 観音寺遺跡 | 10. 立部遺跡 | 11. 観音寺跡 | 12. 竹内街道（丹比道） |
| 13. 丹比道周辺遺跡 | 14. 丹上遺跡 | 15. 真福寺遺跡 | 20. 真福寺跡 | 36. 八下遺跡 | 40. 薬仙寺遺跡 |
| 41. 清堂遺跡 | 42. 丹南遺跡 | 52. 立部古墳群 | 130. 郡戸遺跡 | 176. 郡戸東遺跡 | |

図3 周辺の歴史的環境（1:20,000）

谷より浅い開析谷を形成して南から北へ流れている。調査地点付近より西側では東西方向に伸びていた丹比道が、調査地点の北東側約70m付近から南東側に折れ曲がって東除川を横切っている。また斜行溝と呼ばれる東除川から西除川に中位段丘上を越えて通水していたのではないかと考えられる大きな溝の跡が部分的に検出されている（この溝の痕跡は、わずかではある）。調査地点の北側約100m付近で丹比道が南東方向に折れ曲がる辺りから、北西方向の松原市高見の里方面に伸びている。

調査地周辺で過去に松原市や羽曳野市、美原町の教育委員会の手で相当な数の調査が実施されている。調査地点の北西側約250mの観音寺集落内の調査では、中世鋳物師の遺構・遺物が数多く発見されている。同様な中世の鋳物師の遺構は、調査地周辺の中位段丘上のあちこちの遺跡から発見されている。

調査地点の南約200m付近では奈良時代の掘立柱建物が数多く調査されている。この建物群は2間×7間の細長い建物がコの字形に配置されている可能性がある。これらは建物規模の大きさや配置構造から通常の農村集落とは考えられない（図4）。また南700m付近には真福寺遺跡があり、中世の掘立柱建物群や溝、そして中世鋳物師に伴う遺物が数多く出土している。また調査地点の東約1kmの東除川に面した高台では帆立貝型式の古墳が調査されている。この周囲には古墳が幾つか埋没しているらしい。

調査地周辺の中位段丘上には縄紋・弥生時代の遺構は見られない。古墳時代の遺構は水が得られる川沿いに主にみられて、少し高い箇所に古墳が築造されていたようである。古墳時代後期には急に中位段丘上面に集落が出現する。そして中世には中位段丘上面に数多くの集落が現れて、しかも鋳物師を生業としている例が多く見られる。この地域一帯は中位段丘上面に条里制が施行されており、中位段丘上の開発が一部分では古代から、そして恐らくは大部分が中世になされた可能性があり、早くから開発が始まった事を示しているようだ。このようにこの地域は南河内地方における中位段丘上の古代から中世に至る開発過程を理解するうえで、重要な位置を占めている土地である。

また美原ロータリー内でこれまでに実施された丹上遺跡の調査では、方墳の周溝や斜行溝、狭山池から続く主要幹線農業用水路の跡など数多くの遺構が明らかにされている。

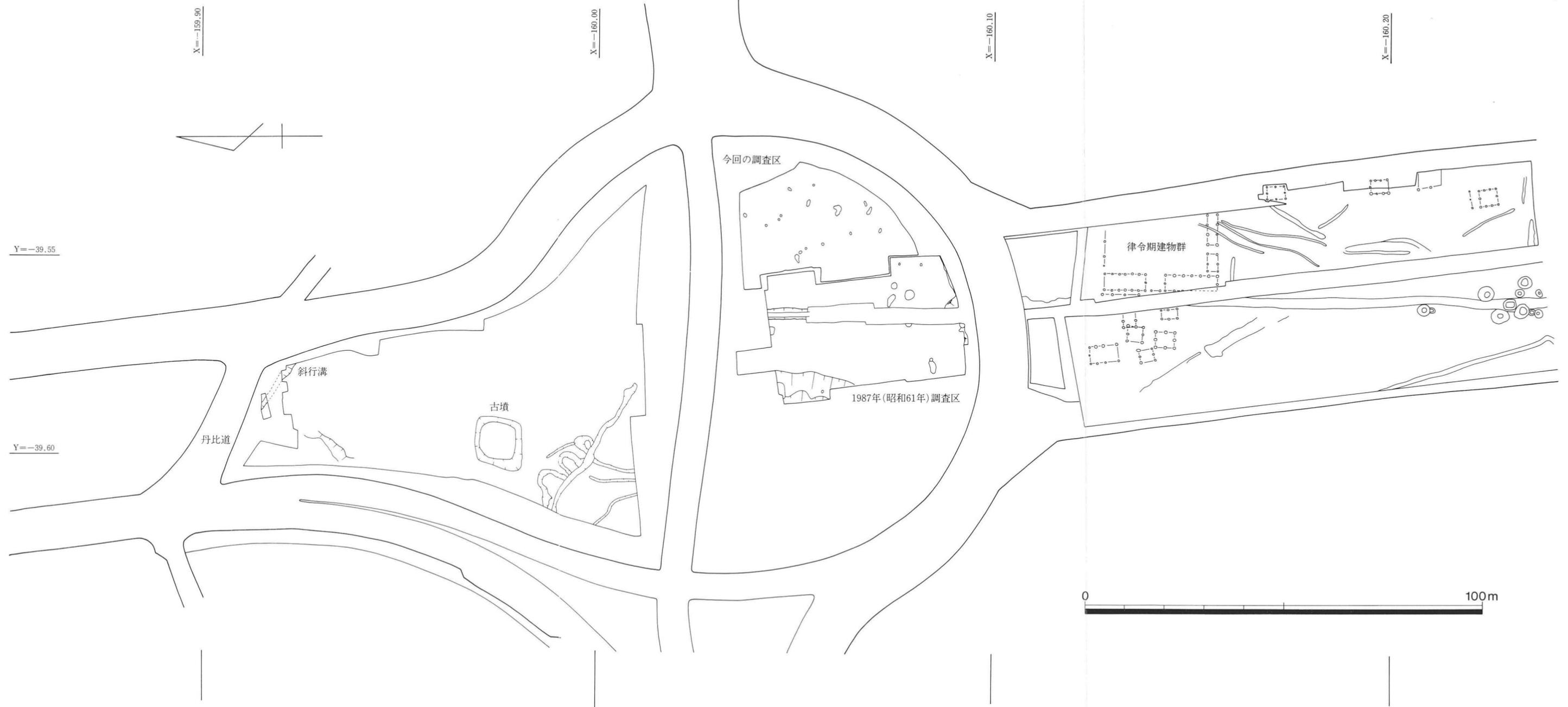


図4 丹上遺跡周辺図 (1:1000)

III 調査の成果

1) 基本層序 (図5・写真3・4・5)

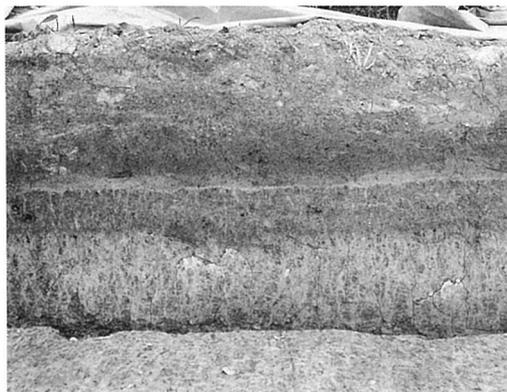


写真3 北側壁面 (南から)

当調査地周辺は南から北へ緩やかに下降している地形を示している。調査地の中段段丘上の標高は約36mを測り、調査地内の北端と南端距離約45m間に高さの差は約30cm前後を測る緩やかな傾斜である。調査地の最上層に耕作土層がある。この下層に場所によって異なるが、多い所で3層の床土がある。厚さ約15cmを測る3層の床土中から瓦器碗、平瓦等の遺物が出土している。この下層は中段段丘層でその上部は灰黄色粘質土層の黄色より灰色が際立っている色調

である。この下層約1.5mまできめの細かな粘質土層が続いて堆積しているが、これより下層では赤褐色粗砂層がみられる。これを層序で示すと次の通りである。

I層 耕作土層 中央環状線が開通するまで、水田か畑であった有機物を多く含んだ暗灰色の耕作土層である。厚さ約15cmを測る。

II-1層 床土上層 灰白色10Y R8/1～浅黄橙色10Y R8/4粘砂質土層で、最も厚い箇所では6cmを測る。調査区内中央付近に堆積している。

II-2層 床土中層 灰白色10Y R8/1～明黄褐色10Y R7/6粘砂質土層で、最も厚い箇所では6cmを測り部分的に堆積している。

II-3層 床土下層 灰白色7.5Y R8/1～黄橙色10Y R8/6粘砂質土層で、最も厚い箇所では3cmを測る。この層は調査区内全面に広がっており下層は中段段丘層である。

III-1層 中段段丘層 褐灰色7.5Y5/1～にぶい黄色2.5Y6/4で礫を多く含む粘質土層で、最も厚い箇所では40cmを測る。III-2層の上層にある。

III-2層 中段段丘層 灰白色2.5Y7/1粘土層で浅黄橙色10Y R8/4粘土

II-1層	I層	I層	耕作土 15cm 暗灰色
II-2層	II-1層	II-1層	床土上層 6cm 灰白色10Y R8/1～浅黄橙色10Y R8/4粘砂質土
II-3層	II-2層	II-2層	床土中層 6cm 灰白色10Y R8/1～明黄褐色10Y R7/6粘砂質土
	II-3層	II-3層	床土下層 3cm 灰白色7.5Y R8/1～黄褐色10Y R8/6粘砂質土
	III-1層	III-1層	中段段丘層 40cm 褐灰色7.5Y5/1～にぶい黄色2.5Y6/4 礫を多く含む粘質土
	III-2層	III-2層	中段段丘層 40cm 灰白色2.5Y7/1粘土 間に浅黄橙色10Y R8/4粘土が入る
	IV層	IV層	中段段丘層 50cm 灰白色5Y7/2～浅黄色5Y7/3粘質土 間に浅黄色2.5Y7/4粘質土が入る
	V-1層	V-1層	中段段丘層 40cm 淡黄色7.5Y8/3～明黄褐色2.5Y7/6 小さな礫を含むシルト
	V-2層	V-2層	中段段丘層 30cm 灰白色2.5Y8/1～浅黄色2.5Y7/4粘質土
	VI層	VI層	中段段丘層 50cm 灰白色2.5Y8/1～浅黄色2.5Y7/3粘質土

図5 層序模式図

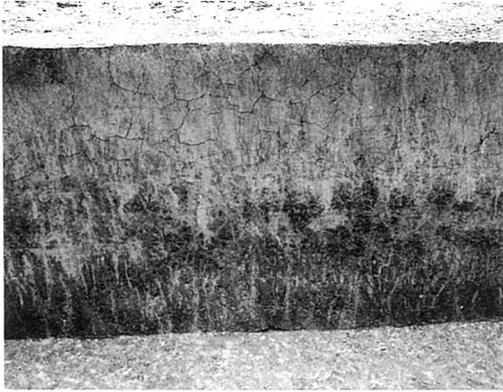


写真4 東側壁面（西から）

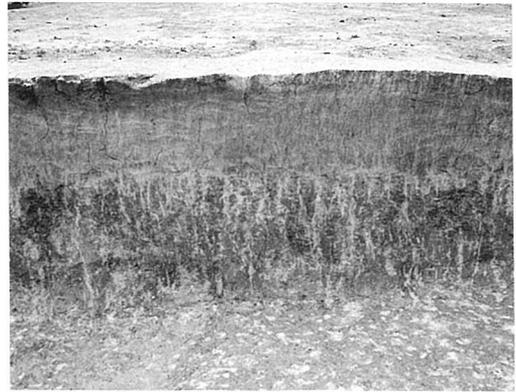


写真5 東側壁面（西から）

層が間に入る。最も厚い箇所では40cmを測る。

- IV層 中位段丘層 灰白色5Y7/2～浅黄色5Y7/3粘質土の間に浅黄色2.5Y7/4粘質土層が入る。最も厚い箇所では50cmを測る。
- V-1層 中位段丘層 淡黄色7.5Y8/3～明黄褐色2.5Y7/6小さな礫を含むシルト層で、最も厚い箇所では約40cmを測る。この層は調査区南側では砂礫層に次第に変質する。この最も粒子が粗い箇所が一番深く堆積しており、堆積当時の流路であったらしい。従って流路から離れるとともに砂粒が次第に細くなる。
- V-2層 中位段丘層 灰白色2.5Y8/1～浅黄色2.5Y7/4粘質土層で、最も厚い箇所は約30cmを測る。
- VI層 中位段丘層 灰白色2.5Y8/1～浅黄色2.5Y7/3粘質土層で、最も厚い箇所は約50cmを測る。

2) 遺構（表1・図6・7・写真6・7・8）

検出した遺構は土坑13基、ピット3個である。しかし遺物の出土した遺構は無く、性格の明らかな遺構も無い。そして遺構が集中してあるのではなく、散らばっている。またその形状も不定形なものが多い。遺構内の埋土も灰白色2.5Y8/1～灰白色2.5Y8/2、黄灰色2.5Y6/1、明褐色7.5YR7/1～褐色7.5YR6/1、褐灰色10YR6/1、明オリーブ灰色2.5GY7/1等の比較的薄い色調が多く、有機物は多く含んでいない。そして複雑な堆積層序を示す遺構は無く、単純な堆積層のものが多い。大きな遺構では全長約2.6mを測るものもあるが、大半は2m未

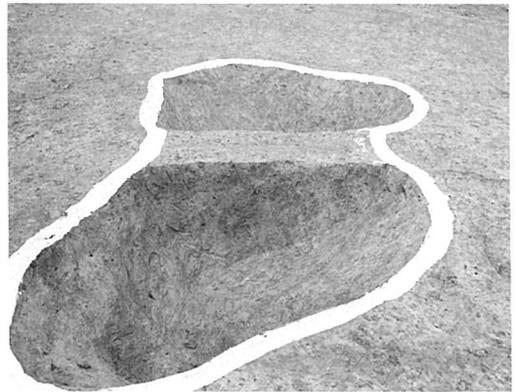


写真6 遺構8（南から）



図6 遺構平面図 (1:400)

溝の遺構で、さらに1 m以下の小さな遺構が多い。

周辺の遺跡において、旧石器時代に属すると思われるサヌカイト製の剥片が出土している数多くの例があるので、当調査地においても下層にこれらの遺物が含まれているかを調べる為に、調査地を十字に深く掘り下げたトレンチ調査を行った。しかし調査範囲内にはこれらの痕跡は窺えず、遺物も出土しなかった。

個々の遺構の埋土や数値は断面図と遺構一覧を参照されたい。

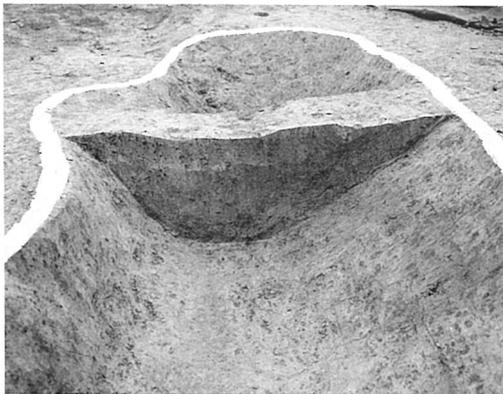


写真7 遺構9 (北西から)



写真8 遺構11 (北東から)

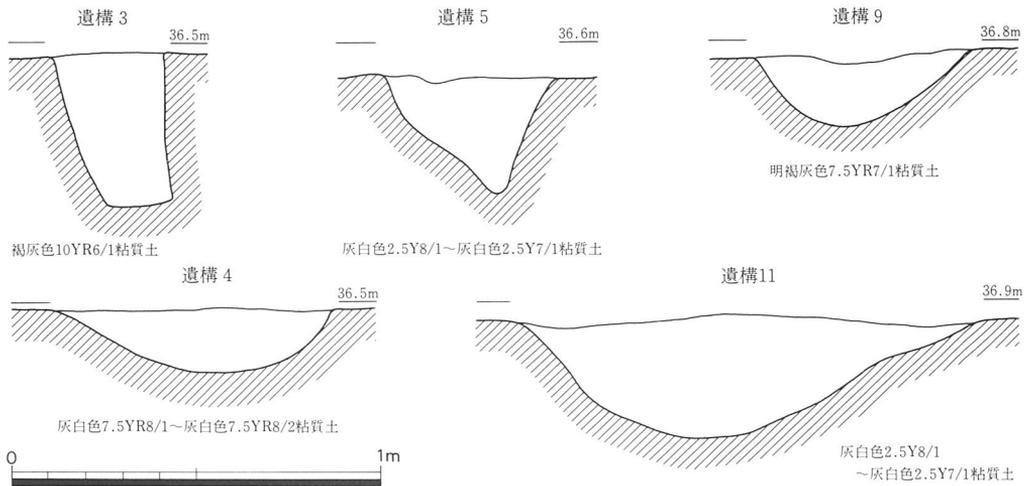
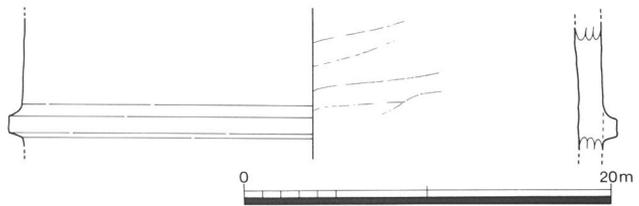


図7 遺構断面図 (1:20)

3) 遺物 (図8)

今回調査した遺構の中からは、遺物は出土していないが、床土II層から平瓦破片、土師器破片、瓦器碗破片、埴輪破片などの遺物が少量出土した。



実測可能な遺物は円筒埴輪の小片

図8 出土遺物 (1:4)

1点だけである。この資料は近くに埴輪を持った小型の古墳が存在していた可能性を示している。

遺構番号 本報告	地区割	規模 (cm)			主要埋土	形状	本文 P.	遺構		備考
		長さ	幅	深さ				図	写真	
遺構1	K16f9, 10	227	92	43	灰白色2.5Y7/1粘質土	長楕円形	8, 9	6	—	土坑
遺構2	K16f9	78	48	10	灰白色2.5Y7/1粘質土	楕円形	8, 9	6	—	土坑
遺構3	K16f9	46	33	44	褐灰色10YR6/1粘質土	円形	8, 9	6, 7	—	ピット
遺構4	K16d8	71	28	22	灰白色7.5YR8/1粘質土～灰白色7.5YR8/2粘質土	円形	8, 9	6, 7	—	土坑
遺構5	K16e9	63	43	30	灰白色2.5Y8/1粘質土～灰白色2.5Y7/1粘質土	楕円形	8, 9	6, 7	—	土坑
遺構6	K16e9	77	34	7	灰白色2.5Y7/1粘質土～黄灰色2.5Y6/1粘質土	楕円形	8, 9	6	—	ピット
遺構7	K16e8	61	40	21	灰白色2.5Y8/1粘質土～灰白色2.5Y7/1粘質土	卵形	8, 9	6	—	土坑
遺構8	K16e8	101	51	29	黄灰色2.5Y6/1粘質土	台形	8, 9	6	6	土坑
遺構9	K16f8	159	68	26	明褐色7.5YR7/1粘質土	長方形	8, 9	6, 7	7	土坑
遺構10	K16f8	38	26	7	明褐色7.5YR7/1粘質土～褐色7.5YR6/1粘質土	円形	8, 9	6	—	ピット
遺構11	K16g8	260	213	33	灰白色2.5Y8/1粘質土～灰白色2.5Y7/1粘質土	不定形	8, 9	6, 7	8	土坑
遺構12	K16g8	110	39	11	灰白色2.5Y8/1粘質土～灰白色2.5Y7/1粘質土	不定形	8, 9	6	—	土坑
遺構13	K16g8	197	43	16	灰白色2.5Y8/1粘質土～灰白色2.5Y7/1粘質土	長楕円形	8, 9	6	—	土坑
遺構14	K16f9	73	53	18	灰白色2.5Y7/1粘質土～灰黄色2.5Y7/2粘質土	楕円形	8, 9	6	—	土坑
遺構15	K16g9	69	33	8	灰白色5Y8/2粘質土～灰白色5Y7/1粘質土	不定形	8, 9	6	—	土坑
遺構16	K16h9	104	53	36	明オリープ灰色2.5GY7/1粘質土	卵形	8, 9	6	—	土坑

表1 遺構一覧

IV まとめ

今回の調査地からは時期不明の土坑が13基、ピットが3個確認された。

遺構内から遺物が出土せず、時期の判断は難しい。しかし埋土が比較的薄い色調の遺構が多い事から、古代の官衙的な建物やそれに付随する遺構の可能性は少ないと思われる。むしろもう少し古い時期の遺構の可能性が高いようだ。

次に時代順をおって、この調査地とその周辺の変遷を述べる。この調査区だけの資料では欠落している時代の資料が多いので、隣接して実施した調査時の資料も合わせて考察する。

1) 旧石器時代、縄紋時代、弥生時代

隣接した調査区で縄紋時代と思われる石鏃が出土している。しかし住居などは明らかにされておらず、生活空間に隣接した行動範囲内の空間であったようだ。

眼を広く見渡すと、南河内に広がる中位、高位段丘上のどこを調査しても、旧石器や縄紋時代のサヌカイトの石器や剥片が少量であるが出土する傾向が見られる。即ち広大なこれらの土地は現在とは違った景観を当時は示していたとしても、これだけ石器類が出土する事は当時の人々の生活圏であったと推測される。

そして次の弥生時代には中河内を中心とした沖積層上に立地した遺跡に弥生文化の華が大きく開き、北九州と並ぶ畿内地方の弥生文化圏を作っていた。しかし距離的にさほど離れていない南河内の調査地周辺にこの弥生文化が及んでいた痕跡は全くと言って良いほど見られない。東除川や西除川の形成した沖積地やそれに連なる開析谷にわずかに土器が出土する例があり、かならずしも弥生文化が波及していないとは言い切れない状況であるが、河内平野の状況と比較した時に、その落差はあまりにも大きい。中河内地域の弥生文化圏の範囲はおおまかには沖積層が形成している平野部が中心となる。部分的には中位段丘層の間の開析谷にも見られるが少量である。中位段丘上面での弥生文化の波及はあまりにも希薄であり、ごくわずかである。南河内地域の大和川の支流、石川流域にも弥生文化は色濃く浸透している。このような状況から推測した時に、中位段丘上面と沖積層の平野部の地形上の差が弥生文化の波及には大きな障害となっていたようである。

2) 古墳時代

古墳時代には近隣の調査区の成果と合わせて考えれば、須恵器、土師器、埴輪が出土している。須恵器は以前の調査区の方墳と思われる周溝内から出土している。これは須恵器壺で体部上半に波状文を施している。底部には平行叩きが未調整のまま残っている。また土師器甕が土坑内から出土している。埴輪片は円筒埴輪で突帯は基底部から逆台形状に突出して、上端部幅は狭くなく、

上端面の稜線は磨耗しているが、作られた当時は鋭くM字状であったと思われるものである。体部外面の刷毛目の調整は剝離して分からないが、内面調整は斜めのナデである。黒斑は残存している範囲では見られない。透かし孔も分からない。年代観は5世紀後半から6世紀前半かと思われる。調査地の西側に南から北に入る浅い開析谷があり、このような円筒埴輪を立てた古墳がこの谷に面した位置に造られていたらしい。そしてこの浅い開析谷では古墳時代後期頃から開発が進んで水田が営まれていた可能性がある。そして当時は中位段丘上の高い尾根状部分は未開発であった可能性がある。またこの頃に中位段丘上の浅い開析谷を利用して溜池も幾つかすでに築造されていたようである。しかしその数は現在見られる溜池の様に数多く築造されているのではなく、ごく少数の限られた数であったと推測される。

この時代には河内平野から石津川流域では、沖積地や中位段丘上に隣接した範囲が開発の対象となり、耕地は一層拡大しているようである。しかし百舌鳥古墳群や古市古墳群などの巨大古墳群を築造した古墳文化は当調査地の北約1.2kmに河内大塚山古墳を築造しているし、隣接した北側のM調査区に一辺9mを測る方墳らしい溝があり、調査地周辺にも確実に古墳文化は波及している。古墳時代後期のある時期には、周囲に幾つもの大、中、小の数多くの古墳が見えたと思われる。弥生文化は中位段丘上面には波及しにくかったことから、地形的な制約を乗り越えられない側面を持っていた。しかし古墳時代には従来障害であった中位段丘の地形環境もある程度克服しえるようになり、調査地の周囲にも幾つかの集落が出現しはじめている。この事は中位段丘上の開発が全面とはいかないまでも、開発しやすい箇所を中心に進んでいた事を物語っていると思われる。

3) 奈良時代

今回の調査成果はこれまで実施された観音寺遺跡や丹上遺跡などこれまで当調査地から約500m以内で実施された調査成果から比較すると検出された遺構が非常に少なく、当時は空き地であったと思われる。これまでの調査では古墳と思われる遺構や土坑、掘立柱建物の集落跡、溝、開析谷等が明らかにされてきた。しかし奈良時代に限ってみると遺構は隣接した調査範囲でも希薄である事には代わりはない。この事は南に位置している律令期の方形区画と思われる建物群とそれに伴う建物が今回の調査地に延びていない事を意味している。即ちこの調査地以南に建物が建てられて、調査地の範囲では建物も建てられないような土地であった可能性がある。古代官道が整備されて、都への流通網が作られるとともに、水運も重要視されて、運河もあわせて整備されていたようである。堺湊から住吉の湊から物資が陸揚げされて、この丹比道や大津道を通して奈良盆地に運びこまれていたと思われる。また先に述べた斜行溝も物資輸送用の運河として用いられていた可能性もある。もしそうであれば丹上遺跡の調査地南側にある古代の方形区画らしい建物群は、これらの官道や運河で運ばれた物資を一時保管したりするような、流通に関連した役割を担っていた施設であったかも知れない。そして調査地の空間は物資を一時保管したりする、物資の流

通に関連した場所であったのかも知れない。あるいはこの施設の前に設けられた広場であったのかも知れない。

この頃には調査地近隣に集落の存在は知られていない。しかし範囲を広げて見れば南河内地方の中位段丘上に古墳時代後期から集落が急に出現している例が多く見られる。この背景には狭山池がこの頃に築造されて、中位段丘上を開発できる条件が産み出されて、それに伴って集落が急増しているようだ。この状況は渡来系氏族が南河内地方の未開発の地に住み着いて、かれらの持つ高い水準の技術によって南河内地方の開発を指導していた背景があったからであろう。そして部分的に検出されているだけで、南河内全域に広がるとは言えないまでも、道状の両側溝をもった遺構で方形に区画されている例が幾つか検出されている。しかしこの両側溝も灌漑用水を目的とした構造ではないようである。地形を無視して直線的に掘られているからである。恐らくは条里制に先行する何らかの方形区画がすでにこの頃に部分的にしる施行されていた可能性がある。しかしこの区画も長続きするのでもなく、すぐに廃棄されているようである。しかし条里制に先行する区画が存在している事はすでに中位段丘上の土地に何らかの価値が認められていた事を物語っているように思えてならない。

4) 平安時代

この時代を示す資料である黒色土器が隣接した調査地から出土している事から、依然として中位段丘上は耕作地か集落に隣接した土地として存在していたようである。また集落は幾つか継続していたと思われるけれども、この時代の遺物資料や集落の資料は少ない。次の時代の躍進的な開発状況を示すのでは無くて、どちらかと言えば停滞気味な社会の様相を示しており、調査地周辺もこのような状況を反映していたようである。

しかしこの時代にも屋敷地が中位段丘上に営まれていて、中位段丘上が耕作地として廃棄されてしまう事はなさそうで、前代から後退した状況とまではいかないのではないだろうか。

5) 鎌倉、室町時代

この頃には北側に隣接したM調査区の中にある開析谷が埋められて、平坦な土地を造成して新しい水田を造り出している。この頃の条里制水田の床土や平坦にする為に埋められた谷の客土層から瓦器碗破片が出土する例が多いことから、この頃から中位段丘上のかなりの範囲に条里制が施行され始めたと推測される。この頃は南河内地方の再開発の時期と考えられて、中位段丘上面にも条里が施行されて東除川、西除川流域の沖積地を除いた範囲で条里制の開発が広がっている。中世の終わり頃には日置荘田中町や大美野、深井、檜葉、東山、伏尾等の高位段丘や中位段丘上の限られた箇所が開発に適さない箇所が荒地として残っていただけのようなのである。この開発の詳細な時期は各地域において少し異なる状況があり、丹上や清堂遺跡等では瓦器碗の体部外面調整が半ば消失した12世紀後半頃に開始されているのではないだろうか。すでにそれまでに開析谷

に幾つか溜池が作られていたようであるが、この頃にはさらに多くの溜池が築造されたようである。従って溜池の築造が開析谷の窪んだ地形を利用するので、溜池が連なって続く景観はこの頃に部分的に作られているようである。

6) 安土桃山、江戸時代

この時代の始め頃には南河内地方の中位段丘上は開発し尽くされて、羽曳野丘陵や日置荘田中町や大美野、福田、深井、檜葉、東山、伏尾などの水利の問題を解決しにくい土地条件の高位段丘上が未開発の地として残っていたようである。この残された未開の範囲が17世紀後半から18世紀にかけて資金力を投入した請負新田として開発されたようである。しかし水を得る事の出来ない羽曳野丘陵の高い部分などは未開発のまま最近まで残っていたようである。

報告書抄録

ふりがな	たんじょういせき その8 はくつちょうさほうこくしょ							
書名	丹上遺跡(その8)発掘調査報告書							
副書名	中央環状線美原ロータリー道路改良工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	入江正則							
編集機関	(財)大阪文化財センター							
所在地	〒536 大阪府大阪市城東区蒲生2丁目10-28 大阪府城東庁舎7F TEL 06-934-6651							
発行年月日	西暦 1994年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たんじょういせき 丹上遺跡	おおさかふみのみかわち 大阪府南河内 ぐんみはらちやうたんじやう 郡美原町丹上	27385	14	34° 33' 22"	135° 34' 07".5	1994.02.08 { 1994.03.25	約1,100	主要地方道大阪中央環状線内の美原ロータリー内での道路改良工事に伴う事前の埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
丹上遺跡	不明	不明	土坑 13基 ピット 3基		遺構の中からの遺物の出土はない 床土II層から 平瓦破片・土師器破片 瓦器碗破片・埴輪破片		実測可能な遺物は円筒埴輪の小片一点だけである	

丹上遺跡（その8）

中央環状線美原ロータリー道路
改良工事に伴う発掘調査報告書

発行 1994. 3. 31

財団法人 大阪文化財センター

〒536 大阪市城東区蒲生2丁目10-28

T E L 06-934-6651

印刷 株式会社 中島弘文堂

